

大学キャンプ実習が参加者の他者受容と対人恐怖心性に及ぼす影響

井上泰佑 (京都教育大学)

1. 目的

本研究の目的は、大学キャンプ実習が参加学生の他者受容と対人恐怖心性の変容に及ぼす影響を明らかにし、これらの関連を分析することで大学キャンプ実習の持つ効果を検討することである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：K大学教育学部の正課授業で1年生対象に2022年9月に実施された2つのキャンプ実習の参加者のうち、全てのデータが収集された117名を分析対象とした。
- 2) 調査方法：以下の質問紙調査をキャンプ前、キャンプ直後、キャンプ一ヶ月後の計三回集合法にて実施した。
 - ①他者受容尺度 (上村 2007)
 - ②対人恐怖心性尺度 (堀井他 1996)
- 3) 分析方法：得られたデータはt検定、一元配置分散分析、多重比較及び二元配置分散分析の統計処理を行った。

3. 結果と考察

1) 他者受容について

参加者全体の他者受容合計得点の変化では、キャンプ直後では向上していたが、一ヶ月後には元に戻る事が明らかとなった。他者受容のうち、他者尊重による他者受容の外在化志向得点においては、キャンプ直後にかけての向上は顕著であった。参加前に他者受容が低かった下位群においては、他者受容合計得点はキャンプ直後にかけて向上し、その向上が一ヶ月後まで維持されることが明らかとなり、キャンプ実習の治癒的効果が示された。

2) 対人恐怖心性について

三原 (2007) は2006年に本研究と同様のキャンプ実習において対人恐怖心性の変化を分析しており、新型コロナウイルスの影響を受けた学生を対象とした本研究との比較も行った。

2006年のデータでは、対人恐怖心性得点はキャンプ後に減少していることが明らかとされていた。しかし、本研究の対人恐怖心性得点はキャンプ後に増加し、2006年とは全く逆の変化の仕方であり、二元配置分散分析の相互作用において有意差が認められた。また、キャンプ前の対人恐怖心性得点は2022年は2006年よりも有意に低かったが、キャンプ一ヶ月後には、2006年の得点とほぼ同じ得点となる事が明らかとなった。

本研究の参加者(大学1年生)は、高校生の頃、新型コロナウイルスの影響を受け、他者と深いコミュニケーションする機会も少なく、他者との葛藤場面も少なかった。本研究のキャンプ実習では、毎日の協同作業や意見交換など他者と密な関係になる場面が多く、こうしたキャンプ体験で高校時代に感じたことのなかった対人恐怖をある程度感じるようになり、そうした葛藤を乗り越えたことにより、キャンプ一ヶ月後には2006年の学生と同程度の対人恐怖心性に落ち着いたと考えられる。

3) 他者受容と対人恐怖心性の関連

他者受容得点の変化量と対人恐怖心性の変化量の関連においては、対人恐怖心性がキャンプ直後に下がった対人恐怖心性減少群において、他者受容合計得点が顕著に向上し、両者には負の相関関係があることが明らかとなった。

4. 結論

本研究では、キャンプ実習を経験することで、他者受容は向上し、特に他者受容が低かった学生ではその向上を1ヶ月後まで維持していたことが明らかとなったが、新型コロナウイルスの影響を受けた学生の対人恐怖心性との関連については、今後さらなる研究が必要と考える。

5. 主な参考文献

三原基、大学キャンプ実習参加者の対人恐怖心に及ぼす影響、京都教育大学卒業論文 (2007)